

○佐藤 早織 氏（平成 12 年、息子（当時小学校 3 年生）を交通事故で失う）

[要旨]

息子の事故について

平成 12 年 7 月 7 日、当時小学校 3 年生の息子、翔樹は横断歩道を青色信号に従い渡っていたところを信号無視した大型特殊クレーン車によりひき殺されました。当日は午後から授業参観でしたので、私は「お母さんは必ず行くからね」と見送ったのですが、なぜかすぐ息子が家に戻ってきて何かためらっているような素振りでしたが、すぐに「行ってきます」と、また登校していきました。これがあの子の最後の言葉となりました。3つ上の長女は当時小学校 6 年生、その 5 分前に弟がひかれ、渡ることができなかった横断歩道を渡り、そのときの人々の会話や、前を歩いている子が「気持ち悪い」と言った弟の体の一部を見えています。そんな娘の気持ちを考えると言葉にならない悲しみが私を襲います。私は当時、妊娠初期で直後から流産しかかり、娘のそばにいて話を聞き、優しい言葉をかけてあげることもできませんでした。私自身、呼吸することさえ必死だったような気がします。

娘たちのこと

通夜の準備中、娘がいなくなり大騒ぎになりました。公園で砂遊びをしていたのです。周りの大人たちは「こんなときになんで砂遊びができるんだろうか」と言い、私も「昨晚、翔樹と喧嘩をしていたからいなくなって良かったと思っているのだろうか」とさえ思ってしまった。また、父親との関係では、事故前は再婚したばかりということもあり、必要なこと以外は話すこともなかったのに、事故後は抱っこをせがみ、外に出るときは手を必ずつなぐようになりました。

私が入院中は実母が娘を見ていてくれたのですが、母は自宅に友達を連れてくることを禁止しました。「一周忌もたっていないのに自分だけ楽しいことをしてはだめ。翔樹はもう友達と遊べないんだから我慢できるでしょう」と言われたそうです。友達の家へ遊びに行けば根掘り葉掘り聞かれる。学校へ行けば、何も知らない友達から「きょうだい何人？」と聞かれ、弟の存在を消す。「弟の存在を消した自分がいやになる。自分が死ねばよかったのだ」と私にぶつけてきたこともありました。学校の帰りが遅くなると私はとても心配になり、月に何度も学校へ電話をしました。先生に「そんなに心配なら、学校に毎日迎えに来たらいいのに。交通事故は運が悪い人だけなんだから」と言われたそうです。

娘は高校 3 年生のときに妊娠しました。気がついたときはもう妊娠 5 カ月、「命を大切にと言い、講演をしているのに、どうして中絶をしろと勧めるのか」と私に訴えました。娘は事故後まったく集中力がなくなり、無気力で、精神年齢も小学校 6 年生で止まっている状態でした。「いつ殺されるかわからない」が口癖でした。高校を卒業したときは妊娠 9 カ月でした。先生たちは当時知らないふりをしてくれていたとあとになり知りました。息子を亡くした私に「中絶をするか、退学してください」とは言えなかったそうです。娘は今二児の母ですが、当時はとても大変でした。

事故当時お腹にいて無事に生まれた次女は、現在、高校 2 年生です。幼いころからおやつやご飯を食べるとき、いつも「翔樹の分」と分けてくれます。私が我慢できずに泣いていると「ママ、泣かないで、翔樹はここにいるよ」とお仏壇の前に連れていってくれます。小学生になってからは翔樹が使

えなかった習字道具やリコーダーなど、自ら「自分が使ってあげたい」と言い、学校の先生が「女の子はみんな赤いんだけど、青で大丈夫でしょうか」と心配して電話をくださいました。今は事故現場に近い高校へ毎日通っています。

そして、事故から2年後に生まれた三女は、現在、中学3年生です。この子は亡くなった息子に声やしぐさ、顔も似ています。幼稚園のころ、「事故がなかったら自分は生まれていなかったんでしょう？」と泣きながら私に訴えたことがあります。誰かに「あなたは生まれ変わりだよ」と言われたようです。このころ、三女は情緒不安定になり、突然泣いたり、体をかきむしり、血だらけになったことがありました。私は事故の影響とは思わず、どこに相談してよいのかもわからず悩みました。そんなときかかりつけの先生に教えてもらったのが子ども総合センターでした。心の病の原因は、私の情緒不安定が三女に伝わっていたというのです。「お母さんが心配でたまらないけど、どうしてあげてよいかわからない」と話していたそうです。私は事故から何年たっても自分のことや亡くなった息子のことばかりで、しっかりと心から娘たちと向き合っていなかったのです。

今振り返って思うこと

当時は、家族みんながパニックになり、冷静ではいられなかった。そんなときだからこそ、子どもの話を聞き、支えてあげなければならなかったのですが、裁判が始まり精神的余裕もなく、“放置”と言っても過言ではありませんでした。長女はきっと孤独を感じ、とてつもない不安に襲われたことと思います。せめて私が落ち着くまで、私の代わりにそばで話を黙って聞き、一緒に遊び、思いやりを持って接してくれる人があのときにいてくれたなら、と今でも思います。事故の日から関わってくれた警察官の方、検察庁の方々、弁護士も含め、すべて男性でした。思いのたけを話したくてもなかなか心を開くことができず、私が女性警察官と話ができたのは、裁判も終わり、自分自身で乗り越え、生き抜き、落ち着いたころでした。もっと早く会えていたら、そばにいてくれたら、私は自分の体に傷をつけることも、命を粗末にしようと思うこともなかったし、長女につらい思いをさせることもなかったと思います。あのころ、今のような支援があったら、長女の人生も変わっていたのではないかと今でも思っています。